

「神戸の香り～宮本輝と阪神間モダニズム～」

箕野 聡子

1. はじめに

神戸市灘区にある神戸文学館は、2015年9月18日から12月25日まで、「宮本輝 記憶の神戸へ」と題して、特別企画展を行った。宮本輝は関西文化を詳細に描き込む作家としても知られているが、その舞台は大阪を中心として研究され、神戸・阪神間を中心に考察する動きは未だ十分ではなかったといえる。しかし、神戸市灘区の石屋川の畔で生まれた宮本輝の作品に、神戸・阪神間は特に思い入れの強い場所として描かれていることに間違いはない。では、神戸・阪神間は宮本輝にとってどのような土地であったのか。本稿では、特に阪神間モダニズムに焦点をあて、『流転の海』（第一部）¹、『青が散る』²、『花の降る午後』³、『錦繡』⁴の四作品を考察する。

2. 思い出の出発点

1947年に神戸市灘区弓ノ木町に生まれた宮本輝は、1歳から3歳までをここで過ごした。その様子は、彼の随筆において次のように語られる。

私は神戸の灘区に生まれた。阪神淡路大震災で火の海になったところから少し山側へ行ったところである。

だから海が見えて、六甲山系をあおぐ阪神地区一帯の風景は、私という人間の思い出の出発点となっている。⁵

宮本輝は、阪神地区一帯を「思い出の出発点」と呼ぶ。だが、たった3歳までの記憶が、どれほどその人物の思い出につながっているのか、また、果たしてどれほど作品に表現されるのかという点には、疑問が残る。では、彼が描く「阪神地区一帯」は、彼の直接の記憶とは別のところにもあるのではないか。その疑問に答えるかのように、彼の随筆は続く。

母は、生前、この阪神間のたたずまいが好きで、大阪市で暮らすようになって、折にふれて、夙川や岡本や芦屋や御影の坂道へ行きたがった。経済的に恵まれていたころの思い出は、つねに六甲山系と神戸の海が同時に眺望できる坂道につながっていたのであろう。

この随筆に見る限り、「阪神間のたたずまい」を愛したのは母である。宮本輝の父は愛媛の出身であるが、母は神戸で生まれ育った。とすれば、宮本輝の神戸は、母の思い出の神戸として、母の愛した神戸として体験されたものととらえることができないだろうか。

そこで本論では、宮本輝が過ごした1940年代の神戸とともに、母が過ごした1910～30年代の記憶の神戸をも視野にいれ、宮本輝作品に描かれた「阪神」文化について考察していきたいと思う。

¹ 『流転の海』（第一部）（「海燕」1982年1月号～1984年4月号）

² 『青が散る』（「別冊文藝春秋」1978年夏号145号～1982年夏号161号）

³ 『花の降る午後』（「南日本新聞」「新潟新聞」「徳島新聞」「北日本新聞」その他、1985年7月～1986年2月）

⁴ 『錦繡』（「新潮」1981年12月号）

⁵ 宮本輝『橋の上で尻もち』（「文藝春秋」1997年6月号）

戦後まもなく、三ノ宮と新開地には、米軍基地ができ、神戸にはアメリカの文化が急速に広まった。その様子は、『流転の海』にも描かれていく。しかし、神戸の文化といえは、アメリカ文化以上に、戦前からみられるヨーロッパ文化の影響が注目されるだろう。元町の居留地発信の文化は、大阪などの他の地域にはない独特の文化であった。大阪では、大阪湾の水深が浅いために大型船の停泊が難しく、さらに既にあった町の中に居留地を造り入れようとした街づくりが成功せず、居留地文化は発展しなかった。それに対し、神戸は、生田川の流れを変え、そこにまず居留地を造り、そこから徐々に町が発展したといえる。新しく作られた居留地には、東西南北にまっすぐに伸びる道路が作られ、遊歩道には街路樹やガス燈が並び、ヨーロッパ風の街並みが整備された。

東遊園地には、外国人専用の運動場と庭園が造られ、神戸ビーフを世界に知らしめたオリエンタルホテルが営業し、その建築は雑居地北野に建つ風見鶏の館と同じくゲオルグ・デ・ラランデらが担当した。洋菓子もコーヒーも洋食も、すべて神戸が発祥の地として日本中に広がった。

これらの居留地文化を星の煌めきのごとく作品に描き込んだのが稲垣足穂（1900～1977）である。また、この居留地文化のすぐ隣に労働者の文化があることを描きつけたのが横溝正史（1902～1981）である。彼らが描いた1910～1930年代の神戸文化を享受したのが、その時代に神戸で生まれ育った宮本輝の母であった。宮本輝は、これらの文化が戦争という時代をくぐった後に神戸で生まれる。

では、ここでまず、宮本輝が、自身の母をモデルにして描いた短編『胸の香り』（「文藝界」1994年1月号）を取り上げ、作品に描かれた阪神間モダニズムの考察の序章としたい。

3、川の記憶

「あのへんは、お母ちゃんの思い出のとこやねん。石屋川の時代を思い出すし、松木さんや小高さんの家もあるしなァ」

母は、神戸の御影で暮らした時代がある。昭和十六年から昭和二十四年までで、（中略）父がもっとも羽振りのよかったころ、石屋川の畔の住宅街に、そのあたりでもひととき大きな屋敷を建てて暮らしていたのだった。おそらく、長い年月にあって、その御影の時代が、母にとっても平和で幸福な、豊かな思い出に満ちた期間だったのであろう。

『胸の香り』では、神戸の御影の石屋川の畔が、「母」にとって「平和で幸福な、豊かな思い出」の場所として示される。

1947年に宮本輝は、父熊市、母雪恵の長男として誕生し、1950年に父の郷里、愛媛県南宇和郡に転居するまでの3年間、石屋川の畔に住んでいた。

宮本輝が、作家として名を上げたのは、1977年に『泥の河』（「文芸展望」18号、1977年7月）で太宰治賞を受賞し、1978年に『螢川』（「文芸展望」19号、1977年10月）で芥川賞を受賞してからである。『泥の河』の舞台は大阪である。この作品は、1952年に大阪市に転居し、翌年曾根崎小学校入学した宮本輝自身の記憶が下敷きになったものとして考察されてきた。また『螢川』は、1956年に転居した富山市が舞台になった作品である。この2作品は『道頓堀川』（「文芸展望」21号、1978年4月）とあわせて、川三部作とよばれ、宮本輝を、情景として川を描くに巧みな作家として位置づけたわけであるが、土地の情景描写としてあえて川を選び続けたことは、宮本輝が石屋川の畔で生まれ育ったことと無関係ではないだろう。

4、「香り」という記憶

『胸の香り』は、主人公の「母」が、御影の近くにあるパン屋に行きたいと言い出すことから物語が動き出す。「香り」の描写は、焼き立てのパンの香りから、懐かしい人の香りについて対象を移しながら進んでいく。

入院していた「母」は、同室の女性のもとに毎朝届けられる焼きたてのパンが、彼女の主人が焼いたパンであることを知る。そのパン屋の若い主人と話すうちに、彼の匂いが自分の記憶の匂いと同じであることに当惑し、それが今は亡き夫のものと同じであることに気づく。

あのなつかしい匂いは夫の体臭だと、わかったとき、私は雷にうたれるみたいに、誰もいない真夜中の病院のトイレのなかで立ちつくした。

夫の香り。それも、胸とか首のあたりの香り……。

そして「母」は、夫が好きでもないパンを「神戸から帰って来る際に、六甲道駅で途中下車して、わざわざ買って」きていたことを思い出す。さらにまた、「さすがに神戸だ。大阪には、こんなうまいパンはない」と言っていたことを思い出すのである。

『胸の香り』の中で、夫の香りと同じ香りを持つ青年の存在を知った「母」の衝撃は大きい。しかし、この衝撃は怒りや絶望という感情と発展することはない。「立派なパン屋さんになりはった。父親がないのに、お母さんを助けて、こんな立派なパン屋さんのご主人になりはった。

(略) いろんな思いをしたやろけど」と、その青年の成長過程を思いやるのである。この思いやりには、青年の職業がパン屋であるということが無縁であるとは言い難い。なぜなら、この神戸のパン文化は、「母」の思い出の中で、彼女を支える幸せな記憶であったからである。

生まれてすぐに母親に死なれた彼女は、親戚をたらい回しされ育っていた。四歳のときに預けられた家の隣がパン屋で、主人が時折気まぐ

れにくれたパンのおいしさは、生涯忘れられるものではなく、そのイーストの匂いは「母」の思い出の最初の記憶でもあった。自分の幸福の思い出につながるこの香りが、夫と同じ香りを持つ青年の存在を知った後の「母」の心の動揺を宥めたといえよう。

パンの香りの記憶が、物語の舞台で重要な役割を果たす小説が他にもある。『流転の海』である。『胸の香り』の「母」と、ほぼ同じ年齢が設定されている房江の記憶がそれにあたる。

5、『流転の海』の房江

「へえ、パン屋さんが。まだまだ高いやろなア」

言った途端、焼きたてのパンの、イーストの香りの混じった芳ばしい匂いが、ある哀しみを伴った風景とともに房江の心に拡がってきた。幼いころの一時期、自分はいつも焼きたてのパンの匂いに誘われるようにして目を醒ましたものだったと思った。

房江は三人兄妹の末っ子として神戸の中山手で生まれた。

宮本輝が母雪恵をモデルとして描いたといわれる『流転の海』の房江の回想シーンである。神戸で生まれたという房江は、幼少期、一歳で養女に出され、七歳からは奉公に出される。このような苦労の連続の中で、ふと、思い出す幸せな記憶は、パンの香りにあった。

房江が貰われていった高島家はパン屋を営んでいた。おぼろげな己の幼い姿を脳裏に描くとき、必ずそこには焼きたてのパンの匂いが満ちている。パンのタネをせっせと手でこねている父（房江は七歳のとき、それが実の父ではなかったことを知った）が、煉瓦造りのパン焼き釜のまわりで遊んでいる自分に注いでくれた優しい目も、イ

ーストの匂いと常に混ざり合っているのである。房江は、あの幼かったほんの一時期だけがしあわせだったといまでも思っているのだった。

「しあわせだった」と思える時間を支えるのが、阪神間モダニズムの食文化の象徴ともいえるべき、パンの存在である。神戸のパンは、洋菓子と共に、日本中に例のない発展の様相を見せた。その歴史は、実に幕末にまでさかのぼる。港の開港と共に居留地の発展に沿う形で根付き、開港の翌年には、居留外国人のための外国人ベーカリーが既に開業し、そのうち日本人によるベーカリーも誕生した。ドンクの前身である藤井パンは1905年に既に開業している。第一次世界大戦後には、ドイツ人パン職人のハインリッヒ・フロインドリーブが創業し、カール・ユーハイムとともに、関東大震災後の神戸の食文化の発展に寄与したのである。

房江が折に触れて思い出すパンの記憶は、不遇続きの彼女が生きていく上で重要な心の拠り所であった。房江にとっての阪神間モダニズムは、華やかなものに包まれた哀しみであり、また、同時に、哀しみを乗り越えるための華やかさであった。それは、この文化を作り上げてきた者たちが、生きていくために艱難辛苦を乗り越えてきたことを思えば不思議ではない。先に挙げたハインリッヒ・フロインドリーブもカール・ユーハイムも、第一次世界大戦で捕虜になり、日本に強制連行された後、収容所から解放され、そのまま日本にとどまった職人たちであるからだ。

宮本輝が描く阪神間モダニズムは彼らの世代が享受した文化に止まらず、彼らの親世代が享受した文化を内包している。そのことで、物語の背景は、同時に二つの価値観を同居させるのである。これは『流転の海』にのみいえることではない。宮本輝が阪神間モダニズム作品に描き込んだ他の作品、『青が散る』、『花の降る午後』、『錦繡』にも同様のことが言える。

これら四作品に描かれた阪神間モダニズムを作中で表現するは、主に女性である。『流転の海』では、パン屋の養父に育てられた房江。『青が散る』では、実家の洋菓子店経営に心を砕く夏子。『花の降る午後』では、北野にフレンチレストランを経営する典子。『錦繡』では、香櫨園の喫茶店「モーツァルト」に通う亜紀である。宮本輝が描く阪神間モダニズムが、母の記憶の阪神間モダニズムでもあるとも考えた時、これらは当然のこと捉えることができよう。

そして、『流転の海』に描かれた阪神間モダニズムが、宮本輝の親世代から引き継がれた文化であったのと同じく、『青が散る』、『花の降る午後』、『錦繡』にも、宮本輝と同世代の登場人物たちが親世代から引き継いだ文化が次のように登場する。『青が散る』では、夏子の父とそのパートナーのペールとが作り上げた神戸の洋菓子文化。『花の降る午後』では、典子の義父や隣人のリード・ブラウンらが作り上げた雑居地での多文化共生の絆。そして『錦繡』では、亜紀が通う香櫨園の喫茶店「モーツァルト」の主人夫婦が示す、音楽を介した死生観である。この二世代にわたる阪神間モダニズムの享受が、作品にどのような背景を与えているのか。その考察を、『青が散る』から始めたい。

6、『青が散る』の夏子

『青が散る』は、新設の大学に入学し、テニスに明け暮れた燎平らをはじめとする主人公たちの4年間を綴った物語である。ここに登場する阪神間モダニズムは、燎平が一目ぼれする、夏子という同級生を通して語られる。

フランス菓子の専門店<ドゥーブル>の本店は、三宮センター街の中にあった。店の入口には、職人がケーキ作りを実演してみせる場所があり、奥に何種類ものフランスパンやケーキを売るコーナーがあった。

その横には喫茶室がつづいていて、かなり広い面積にテーブルと椅子がゆったりと置かれていた。(略)「ペールとお父さんとで、このお店を始めたの。ふたりで作ったお店やから<ドゥーブル>って言うのよ」

ドイツ系の職人の多くが第一次世界大戦の捕虜であったり、ロシア系の職人の多くが、例えばマカロフ・ゴンチャロフやフォードル・モロゾフのようにロシア革命を逃れて日本に渡ったロマノフ王朝の宮廷職人であったりしたのに対し、フランス系の職人は、外国人のために戦前から作られたホテル、例えばオリエンタルホテルのコースメニューの食後のデザート作りを任されていたものが多かった。その中で、夏子の父のように、コース料理から独立させたフランス菓子の発展を模索する新しい動きが盛んとなる。

ペールは、夏子が3歳の時に日本に来て、夏子の父と神戸で洋菓子店を始めた。この作品は、宮本輝が追手門学院大学在学中にテニス部で過ごした時間がモデルになっている。とすれば、この夏子3歳という年齢は、宮本輝3歳の年齢の時代と重ねて考えることが出来るだろう。

1950年、神戸では日本貿易産業博覧会(神戸博)が開催されていた。戦後すぐのこの時代に既に神戸では、貿易産業の発展、復活に力が注がれていたということだ。

しかし、この時代に神戸に住む洋菓子職人たちは、終戦後の物資不足の中でどのように、商品を作り、販売していったのであろうか。

戦後、食料品の公定価格は撤廃されたが、菓子作りに必要な砂糖や小麦粉は引き続き政府の統制品であり、これは1952年まで続いていた。森元伸枝氏の『洋菓子の経営学』(プレジデント社、2009年1月)には、そのころの菓子職人に必要であった物資が「やみ市」で支えられていたことが、次のように指摘されている。

統制経済下であったため、店頭でおおっぱりに売買はできなかった。しかし(略)「やみ市」のおかげで、戦後すぐから一九五〇年代にかけて、神戸の街には洋菓子店が増えた。戦前からの洋菓子店に加え、「ドンク」「元町ケーキ」「ローヤル」をはじめ、「コトブキ」「ヒロタ」「ユーハイム・コンフェクト」「G線コンフェクト」などの店が次々と開店していった。「やみ市」のおかげで、三ノ宮から元町にかけてあった数多くの洋菓子店は、地元だけでなく大阪の喫茶店にまで卸すことができた。

大阪梅田新道近くの喫茶店が描かれるのが、『流転の海』である。戦後すぐのこの大阪の喫茶店で、砂糖の仕入れを尋ねる場面があるが、その仕入れもこの三ノ宮あたりの「やみ市」から行っていたのであろう。『流転の海』には、子どもの粉ミルクを調達する場面もあり、この時代の「やみ市」の存在が大きく描かれる。⁶

取り締まりはあったが、外国人の店が多い神戸の特殊事情もあり、大阪や京都ほど強化されなかったらしい。やがてこの「やみ市」は、ジャンジャン市場と呼ばれる三ノ宮の高架下から神戸駅までの約2キロに及ぶ日本一長い市場へと代わる。

夏子の父がペールと店を持ったのは、まさにこの時代であったわけだ。神戸の食文化のモダニズムは、戦後の庶民の復興へのエネルギーと

⁶『洋菓子四五年兵庫のあゆみ』(兵庫県洋菓子協会、1991年)には、「国際都市神戸は、在住する中国人らによって三ノ宮高架下などを中心に戦後すぐやみ市が出現、台湾糖が安く手に入ったほか、水あめ、小麦粉、バター、ミルクなど、菓子業者にとってなくてはならない製菓原材料が安く手に入り、これで乾菓子、洋生菓子、キャラメル、飴菓子、チョコレート、チュウインガムを作り、安く売ったため、遠くから大勢の人たちが買い出しにやってきた」と解説される。

貴重な原材料とのおかげで発展してきたのである。そこでは、日本人と共に、多くの外国人が、生きるための闘いを続けていた。ペールはその頃のことを、「人間が、大切に大切に作るから、ペール・バスチューのケーキはおいしい」と語り、「機械が作る」ようになった今のお菓子を嘆くのである。夏子は、父とペールが作り上げた神戸の洋菓子文化を継承しようとするが、父が死に、年老いたペールがフランスに帰ったことで果たせない。母が洋菓子店を継ぐことになっても、従業員 300 人を抱える店舗として経営を続けるには伯父の力を借りるしかなく、大量生産メーカーとなることを止められないのだ。女であることが、自立の障害となっている夏子にとって、文化の変貌は、女の手には負えないものとして立ちふさがってしまい、夏子はここから、生きる目的を見失い、自分を見失っていったといえよう。

実際には、神戸の洋菓子店の多くは、変貌の途中でフランチャイズ化を止め、弟子制度を重視した暖簾分けで発展を続けることになる。つまりは夏子が目指した方向へと神戸の洋菓子文化は進んでいくのであるが、物語の中ではその道は示されない。

既に婚約者のいる男性との恋に走り、結局別れることになった夏子が、「私はやっぱり傷物やって思ったわ」と語る言葉を聞き、療平は、「夏子は若さとか活力とかいったものではないもっと別の大切な何かを喪ったのかもしれない」と思う。だが、ペールの死の知らせを受けて、墓参りにパリ行くことを決める夏子には、ここで新たな道をみいだすに違いない未来が示唆される。療平が、「何も喪わなかったということは、じつは数多くのかげがえのないものを喪ったのと同じではないだろうか」と考えるように、闘うことができなかったために多くのものを喪った夏子は、この後、「数多くのかげがえのないもの」を見出すことになるであろう。

『青が散る』の作中で果たせなかった夏子の闘いは、『花の降る午後』の典子によって引き

継がれていくことになる。典子にもまた、自分が女であることが、文化の担い手となる上で大きな問題となるのであるが、彼女はこの問題を自分に与えられた〈宿命〉としてとらえることで、生きてゆこうとするのである。

7、『花の降る午後』の典子

『花の降る午後』に登場するのは、洋食文化である。フランス料理店アヴィニオンは、雑居地であった北野異人館通りの坂にある高級フランス料理店である。店主であった義父が亡くなり、夫が後を継いだが、わずか4年で夫も亡くなる。後を継いだ妻の典子は、周囲に支えられながら、全く初めてのレストラン経営を始める。何とかその事業も安定し始めた時、店の乗っ取りを企む者が現れる。この企みと闘うために、典子が頼るのが、神戸に長く在住している外国人たちである。典子と特に親しいのが、中国・福建省に故郷を持つ黄健明とフランス料理店の隣にある商社のオーナーのリード・ブラウンである。夫が子どものころから親しくしていたという彼らは、この土地で生きる術に長けている。彼らは、戦前から神戸に店を持ち、阪神間モダニズムの古くからの担い手であったわけだが、彼等にも計り知れない苦労があったことが作中に語られる。

ブラウンさんも、黄さんも、それに日本旅行中に第二次世界大戦が勃発し、祖国に帰れなくなり、ついにそのまま永住するに至ったソヴィエト人のアンナさんも、自分の味わった苦しみを滅多に口にしたりはしないが、途方もない屈辱に耐え、無数の挫折を乗り越え、いま異国の神戸という街で、それぞれの城を作った。あの人たちはみな、戦争中、敵国の人間として日本で暮らしてきた。ソヴィエト人のアンナさんは、ナチス・ドイツのゲシュタポと日本の憲兵によ

って両親を殺されたのだ。それでも生きつづけた。

阪神間モダニズムは一見華やかに見える。典子のマダムぶりや、夏子のお嬢様ぶりは、その華やかさを具象化したものであろう。しかしその華やかさは、歴史の中で多くの挫折や闘いの末、生み出されたものなのである。第一次世界大戦、関東大震災、第二次世界大戦、日本の敗戦の中で、それぞれが、己のいかんともしがたい＜宿命＞を生きること、生まれた文化なのである。阪神間モダニズムは、まずそこで生きようとした人々が、ただひたすらに「生きつづけた」軌跡なのであろう。

この長い時間をかけて生み出された文化を、宮本輝の世代の主人公たちは、親世代の記憶も含めた歴史の顛末をみつめながら、自分が今できることを模索するのである。文化を存続させることは、決してやさしいことではない。ましてやそれが異文化であればなおさらである。その苦労を知っているから、『青が散る』の夏子は洋菓子店の小規模経営を続けようとしたし、『花の降る午後』の典子はフランス料理店を継続させようとした。

アヴィニョンは、典子にとっては、夫が死ぬことで縁がなくなったはずの店である。「子供が欲しいという、女としては至極当然の願望すら」捨ててまでも、店の経営に典子がかかわるのは、典子がこの文化を作り上げた人々のことを知っているからだ。そしてその文化は、彼女の新しい恋人によって、「しがらみを捨てるってのは、煎じ詰めれば、人生からおりにことになるよ。人生からおりの人間の未来に花が咲いたためしはない」と語られることで、つなぎ留められていくのである。

宮本輝が描く阪神間モダニズムが、人々の心の幸せへとつながるのは、その文化が今華やかな成功を収めているからではなく、形成までに、過酷な過去があってもなお、彼らが「それでも

生きつづけた」、人生からおりに生きつづけたからなのであろう。

宮本輝は、水上勉との対談「華やぎを縫い取る」（『道行く人たちと』文藝春秋、1988年）で、自身の創作姿勢を次のように解説する。

人間の求めているものは、煎じつめれば希望であり、夢であり、幸福であるということです。

向上してゆこうとしている人間を書きたい、生きてゆこうとして闘っている人間を書きたい。

宮本輝にとっての阪神間モダニズムは、「生きてゆこうとして闘っている」人間の文化である。この文化を彼の母の眼をも通して見据えた時、この「生き続けた」という言葉は、宮本輝自身の経験からも大きな意味を持つてくると思われる。それは、生きてゆこうとして闘った母雪恵の姿も映しているといえるからだ。

1959年、宮本輝は、私立関西大倉中学校に入学、1962年には私立関西大倉高校普通科に入学する。この頃、父の事業がうまくいかず、貧困を極めた上に、父の女性問題が起り、母のアルコール依存症が重くなり、自殺未遂をする事件が起こる。母が助かった夜、眠れないままに読んだ井上靖の「あすなろ物語」の感動が、彼を読書に熱中させることになったという。

父が借財を残して死ぬのは、宮本輝が22歳のときであった。その時母は、新聞の求人広告を見て、ホテルの社員食堂の賄い人としてすぐに働き始めた。一度死んで生き返った母の、人間として強くなった姿は、宮本輝自身が大病をした後に書かれた『錦繡』にも、影響を及ぼした。

宮本輝は、肺結核で入院する前に、体の不調をおして、友人と蔵王を旅行した。そこで見た「すさまじい紅葉と満天の星」とは、彼に〈生死〉以外のものは考えさせなかったらしい。

〈生死〉以上に大切なものなど、この世に何ひとつないという思いは、私の、ひいては生き物すべての生命をつかさどる〈不思議なるもの〉を燦然と輝かせてきた。⁷

一度死んだ人間が生き続けていく物語。それが『錦繡』である。愛人が起こした無理心中により、死をみてから生き返った靖明と、靖明との離婚から十年以上の歳月を経て、彼と偶然に蔵王で再会した亜紀の往復書簡からなる小説を次に考察していく。

8、『錦繡』の亜紀

蔵王のダリア園から、ドッコ沼へ登るゴンドラ・リフトの中で、まさかあなたと再会するなんて、本当に想像すら出来ないことでした。私は驚きのあまり、ドッコ沼の降り口に辿り着くまでの、二十分間、言葉を忘れてしまったような状態になったくらいでございます。

以上は、十四通の往復書簡の一通目の書き出しである。亜紀は再婚後にもうけた清高という名の、障がいを持つ息子をつれている。亜紀の驚きの理由は、偶然に再会した靖明が、離婚した相手であったことにのみあるのではない。靖明が起こした別の女と心中事件後、彼らは十分な話し合いも待たないままに離婚しており、亜紀はその過去の時間から自由になることができないでいたからである。靖明の出現は、亜紀が過去の時間から自由になり、今を生きるために必要な、唯一の機会であったからだ。

ゴンドラリフトで偶然出会い、ほとんど言葉を交わすことなく別れた後、この男女は、その後再び会うことなく、ただ、手紙のやり取りだけでお互いを理解しようとしていく。「全篇手

紙のやりとりだけで構成された作品を書くことは中学生のときにドストエフスキーの『貧しき人々』を読んで以来の夢」であったと、宮本輝は「『錦繡』の一読書への返信」（「日本経済新聞」1982年12月18日）において語っているが、その方法は困難を極めたともいう。

手紙の中では、相手は常に、過去の記憶と現在の想像の中にいる。二人が、現在を生きながらも、現在を交わらせることなく、想像と記憶とで理解しあおうとする過程で浮かび上がってくるのは、自分自身の姿であろう。手紙とは自己告白である。主人公達は、手紙を書くことで、自分の記憶をたどり、相手の思いを自ら想像し、自分自身を知っていく。『錦繡』の亜紀は、自己告白の中で、自身の〈宿命〉を知り、その〈宿命〉に生きることを決意するのである。そして靖明もまた、自己体験を反復することで、〈宿命〉に立ち向かう勇気を得る。さらに、心中の生き残りとして〈生死〉をさまよったという靖明の極めて個人的な体験は、書簡体という自己告白としての装置の中で語られることで、読者受容を可能にしたともいえよう。だからこそ、蔵王で〈生死〉を彷徨った、宮本輝自身の個人的体験も、この物語と共に理解されるのである。

私のなかに生じた思いは、ひとことと言えば、「死んでも生きているのだ」ということだった。その言葉は、ふいに私のなかで、とてつもない歓びとなって膨れあがった。私たちは、ときに死という形をとったり、ときに生という形をとったりはする。けれども、私たちの根幹を為す生命に消滅というものはない……。⁸

この死生観を作中でもっとも印象的な言葉で語るのは、モーツァルトの曲しか流さない喫茶店に、出入りすることになった亜紀である。亜紀もまた、靖明との離婚を通して〈生死〉の問題に深くとらわれていたと思われる。彼女は、

⁷ 宮本輝「三つの〈初めにありき〉」（「朝日新聞」1991年1月13日）

⁸ 宮本輝「三つの〈初めにありき〉」同前

優しさと哀しさが同居するモーツァルトの音楽を聴き、「生きていることと、死んでいることは、もしかしたら同じことかも知れへん」と感想を述べるのである。これを、喫茶店「モーツァルト」の主人は「宇宙の不思議なからくり」、「命の不思議なからくり」だと解釈する。

晩年モーツァルトは多くの死に接した。1787年5月には父親レオポルトが死去。翌1788年6月には長女テレジアが夭折している。その年にモーツァルトは、重紀が「神戸の海のどろりとした輝き」を思い浮かべた交響曲第39番を6月に、さらに7月に第40番、8月に第41番を立て続けに完成させ、1791年に死去した。⁹

宮本輝が強く影響を受けている小林秀雄の評論「モーツァルト」では、モーツァルトが、ふたつの精神状態を受け入れた人物として、死を知らながら、生を生きた人物として、分析された。

全く相異なる二つの精神状態の殆ど奇蹟の様な合一が行はれてゐる様に見える。名付け難い災厄や不幸や苦痛の動きが、そのまゝ同時に、どうしてこんな正確な単純な美しさを現す事が出来るのだろうか(略)命の力には、外的偶然をやがて内的必然と観ずる能力が備はつてゐるものだ¹⁰

「外的偶然をやがて内的必然と観ずる能力」を、宮本輝は〈宿命〉を受け入れる力だとした。

そして、この〈宿命〉を受け入れる力こそが、阪神間モダニズムを作り上げてきた人々の原動力であったといえよう。過酷な状況をも〈宿命〉と受け入れながら、この地で生きつづけたことが、多種多様の文化を神戸に継続的に根付かせ

たのだ。その文化の混在は、蔵王の錦繡の景色にも似ている。

自分の命が、絶え間なく刻々と色変わりしながら噴きあげている錦の炎である。美しい、と簡単に言ってしまう自然現象などではない。それは私である。それは生命である。汚濁、野望、虚無、愛、憎悪、善意、悪意、そして限りなく清浄なものも隠し持つ、混沌とした私たちの生命である。どの時期、どの地、どの境遇を問わず、人々はみな錦繡の日々を生きている。¹¹

愛、憎悪、善意、悪意といった、相反するはずの感情が共存することが可能な世界では、この世のものはすべて混沌と混在する。相反する価値観さえもが共存することが、その世界であるとすれば、そこには、生と死とも例外なく含まれることだろう。この世界観は、〈宿命〉を受け入れながら発展してきた阪神間モダニズムの世界観に通じるものである。

蔵王の秋の紅葉は一斉には染まらない。宮本輝の描く阪神間モダニズムは、この蔵王の混沌と同じく、多種多様の文化が共存した特殊な地域性であり、世代を超えた文化の交わりであった。

宮本輝の思い出の出発点は、母の世代からの記憶の神戸である。それは、華やかでありながら哀しく、軽やかでありながらたくましい、阪神間モダニズム文化である。

¹¹ 宮本輝「錦繡の日々」(「主婦の友」1982年11月号)

⁹ 『錦繡』を書いたときの宮本輝は34歳であった。作中の重紀は35歳、靖明は37歳。そして、モーツァルトが亡くなったのは、35歳である。

¹⁰ 小林秀雄「モーツァルト」(「創元」第1輯、昭和21年12月)

(付記) 本稿は、2015年10月10日に行われた神戸文学館企画展「宮本輝 記憶の神戸へ」記念講演会における講演「神戸の香り～宮本輝と阪神間モダニズム～」の内容をもとに執筆したものです。会場にてご教示賜りました方々に感謝いたします。